

源隆国『安養集』の一考察

——特に七門組織について——

梯 信 曉

『安養集』十卷は、西暦一〇七〇年頃、平等院南泉房に於いて、源隆国と延暦寺阿闍梨数名とによって編纂された文献である。本書は、浄土教の諸問題を論題として掲げ、各論題下には、夫々の問題に関する經典論疏からの引文を列挙するという、資料集の形を採る文献で、編者の私見は一切交えられておらず、論義の為の参考資料集としての性格を、多分に備えたものと考えられる。

本書所掲の論題の数としては、戸松憲千代氏は七十項、恵谷隆戒氏は七十六項とされているが、管見の及ぶ限りでは次の九十五項を数えることができる。

【卷一本】①厭離穢土②欣求浄土③十方仏証明④極楽兜率優劣難易⑤兜率極楽相對⑥極楽十方相對 【卷一末】⑦諸法門中偏勸念仏三昧⑧念仏方法⑨修行久近⑩念仏⑪念仏三昧証⑫現世利益⑬現身見仏 【卷二】⑭正為凡夫説⑮要發菩提心⑯十念⑰滅罪⑱念仏利益⑲是心作仏是心是仏⑳善惡知識㉑知魔非魔㉒往生人所見靈偽

【卷三本】㉓十六想觀㉔十六觀滅罪㉕日想觀㉖水想觀㉗地想觀㉘宝樹觀㉙宝池㉚華座㉛身量㉜相好㉝觀 【卷三末】㉞三輩修因㉟九品往生修因 【卷四】㊱仏迎來不來㊲九品所乘異㊳中陰有無㊴命終心三性五受分別㊵華開遲速㊶得道時異㊷劫量㊸往生相貌㊹往生多少㊺往生難易㊻三輩九品異同㊼九品往生階級㊽三輩九品階位 【卷五】㊾去此遠近㊿国土寬狹①世界安立②国土名号③極樂清泰同異④上下分別⑤三界摂不摂⑥五趣無有⑦雜淨穢同処異処 【卷六】⑧土因⑨国土 【卷七】⑩宝地⑪宝池⑫宝樹⑬道樹⑭衆鳥⑮宮殿樓閣⑯天樂⑰四生分別⑱漏尽通 【卷八】⑲法藏発心⑳弥陀修行㉑成仏久近㉒三身分別㉓仏名号㉔仏寿命㉕來往供仏㉖声聞菩薩多少㉗仏誓願㉘飲食 【卷九本】㉙不退㉚菩薩徳行㉛觀音勢至㉜菩薩授記㉝神通㉞聖衆光明㉟所化身相 【卷九末】㊱三聚㊲女人二乗有無㊳羅漢生不生 【卷十】㊴諸趣往生㊵信毀因縁㊶小教説不説㊷經教興廢㊸翻訳説時㊹教興由致㊺別時意趣㊻五逆謗法生不生

但し①⑤⑧⑨⑪は、論題名が欠如していると思われる項目で、

正四七ノ90c等)なることを示す要文が集められており、この項に引かれる(巻二ノ7丁)『群疑論』巻二には、

若以三本願大悲、引一切凡愚衆生乃至下品下生五逆十惡、但發菩提心、悉得往生。(大正四七ノ38c)

とある。即ち、次の⑤「要發菩提心」は、前項に関連して、凡夫往生の修因として設けられた項目と思われる。また、右の文に触れられた『觀經』下品下生所説の、「具足十念」を考慮に入れたのが、次の⑥「十念」の項であると考えられる。このように、『安養集』の編者は、浄土の法門が正しく凡夫の爲の教えであることを標榜し、凡夫往生の修因として、發菩提心と十念とを挙げているのである。

次の⑦⑧は、第四感果に配すべき項目である。この内⑦「滅罪」は、④から⑥までの凡夫往生の修因との関係で設けられたものと言えよう。また、⑧「念仏利益」は、感果の惣説と言うべき項目であり、この項には、「得生仏前不離仏」(本項所引の『安樂集』巻下・大正四七ノ15c)・「生浄土・当成仏」(同じく『群疑論』巻七・大正四七ノ75b,c)等の当來の利益が挙げられている点で、現益のみを扱う⑨⑩とは趣を異にする。次の⑨「是心作仏是心是仏」は、標題が有るのみで、引文は欠落しているのだが、『安養集』と密接な関係にある『往生要集』は、この問題を、大文第七念仏利益の中で扱っている(大正八四ノ73b)ので、この項は、前項⑧「念仏利

益」に付随するものと考えてよからう。

続く⑩「善惡知識」は、修行の助縁となる善知識と、妨げとなる惡知識とを扱う項目であり、⑪「知魔非魔」の項には、魔所變の仏と眞仏との区別の法を示す要文が挙げられていて、共に第三修因に配される。

次の⑫は、「往生人所見靈偽」(巻二ノ87丁)という論題名になつてはいるが、この項に引かれるのは、往生人所見の境界が虚ならざることを示す『群疑論』巻七定境眞実章(大正四七ノ75a,b)の文のみであつて、この論題名では意味が通じない。ただ、この半丁だけで他に三箇所、「虚」を誤つて「靈」と記すものが見られ、この「靈」も「虚」の誤りと思われる。しかし、「往生人所見虚偽」とすると、言わんとすることと逆の意となるので、ここでは、本項所引の『群疑論』の、「此境為實為虚」という問いの文に依つて、本論題名を「往生人所見虚実」と考えておきたい。いずれにしても、本項は、第四感果に配せられる。

続いて、巻三本の十項目では、『觀經』前三三觀が扱われている。恵谷氏はこれを依報觀・正報觀に分け、夫々を第五依報・第六正報に配されているが、巻三末の三輩九品に関する項目をも含めて、巻三全体を第三修因に配する方が妥当と思われる。

また、巻四の十三項目は、臨終來迎から得道に至るまでの

問題を扱うもので、主に『観經』九品段に依り、感果を論ずる部分である。

次に、巻五から巻九に至る四十項目に注目すると、これらが、極樂の依報・正報に関する問題を扱う項目であることは明らかである。

即ち、巻五・六では、国土の判別が扱われ、巻七の59から65までは、国土の莊嚴を扱う項目となっている。また66「四生分別」では、胎生土・化生土の判別が取り上げられている。よって、68から69までは第五依報に配される。

続いて、巻七末尾の67「漏尽通」から巻九末尾の67「羅漢生不生」までは、阿弥陀仏・諸菩薩、及び往生人に関する問題を扱う項目で、第六正報に配される。この中、67「漏尽通」のみが、巻七にはみ出す形になっている。この項は本来、漏尽通以外の五通を扱う62「神通」の前後に位置すべきものであり、本来位置していた箇所から離脱して巻七の末尾に混入したとも考え得るのであるが、このことは、巻七末尾の数丁に、本書中唯一、大きな乱丁の跡が見られることから推測されよう。このように考えると、巻五・六・七が第五依報、巻八・九が第六正報と、非常に明確に分配されるのである。残る巻十の八項目は、第七料簡に配して差し支え無いものと思われる。

以上の考察によると、『安養集』の九十五項目は、次のよ

源隆国『安養集』の一考察(梯)

うに七門に分配される。

【巻一本】1………第一厭穢 2~6………第二欣淨

【巻一末】7~11………第三修因 12~13………第四感果

【巻二】14~16………第三修因 17~19………第四感果

20~21………第三修因 22………第四感果

【卷三本】23~34………第三修因

【卷四】35~47………第四感果

【巻五・六・七】48~66………第五依報

【巻七・八・九末】67~67………第六正報

【巻十】88~95………第七料簡

これを以って、本稿の一応の結論とするが、別の機会に、これを基として、『安養集』に於ける『往生要集』の受容形態に関する考証を行う所存である。

1 テキストとしては、現在見られる唯一の写本である西教寺藏本のコピーを使用した。尚、以下に示す丁数は、このコピーに、後から付されたものである。

2 戸松憲千代「宇治源隆国の『安養集』に就いて」(大谷学報一九ノ三、365~366頁)。惠谷隆成「浄土教の新研究」176~177頁。以下、惠谷氏の説への言及は、全てこれに依る。

3 標題下に「両段一具」という註あり(巻三ノ17丁)。

4 標題下に「五妙境界」という註があつて(巻七ノ44丁)、この部分に、『往生要集』所説(巻上、大正八四ノ42b)の五妙境界(地相・宮殿・水相・樹林・虚空)の影響が窺われる。

5 惠谷氏はこの次に「讚阿弥陀」という論題を挙げられるが、これは64「声聞菩薩多少」の項中の引用書名(讚阿弥陀偈)の一部を、誤つて論題名として挙げられたものである。

(早稲田大学大学院)